

認知症の人と家族に寄り添う地域

社会福祉法人ジェイエー長野会 特別養護老人ホームローマンうえだ
櫻井 記子

「誰もが安心して自分らしく暮らせる地域づくり」に向けて、地域の人々の連携と協働は重要ですが、特に、認知症の人（本人）が地域で暮らすには、本人をよく知り、地域の実情も分かっている身近な人々がいてくれて、必要な時に支えになってくれたら、どれほど安心なことでしょう。

自施設（特別養護老人ホーム：長期 93 床、短期 10 床、平均年齢 88.7 歳、平均介護度 4.2）は、2002 年 9 月、上田市（人口 15 万 5 千人、高齢化率 29.5%、）東部の豊殿地区（人口 5300 人世帯数 2,180 戸）に、地域住民の誘致運動によって開設されました。その後、住民の運動は地域づくりへと継続されて、住民組織と JA、鹿教湯病院、ローマンうえだが事務局となり、毎年農閑期に「安心」の地域づくりセミナーを開催してきました。受講生は、豊殿地区住民を主に、隣の神科、神川地区住民を含め、2015 年度までに 16 期、約 500 人になります。2003 年、「学んだことを活かし、種まき人になろう」と受講生による同窓会組織を結成。「地域の風を運ぶ・利用者の声を届ける・世代をつなぐ」という施設ボランティア活動は、その後、さまざまな形で地域づくりや支え合いに発展し、施設からも職員が地域に出向き、認知症サポーター養成講座や介護予防体操、介護相談など連携してきました。

認知症支援では、小単位での地域の繋がりを大切にしてきました。ローマンうえだ入所者の 9 割以上は認知症の診断のある方々です。施設では、本人の声をもとに、思いや大切な宝物を知って、その人にとっての良いひと時を生み出す支援を行ってきました。そして、日々のケア実践を地域のサロンや敬老会等でも取り入れてきました。住民同士が、自分自身を形づくっている大切にしてきたことを語り合う会です。すると「誰だって大切なことがある。」「瞬時にその時々の方が蘇ってくる。」「戦時中のことや戦後のこともみんな繋がっているのでいくらでも話せる。」「それぞれの人生だ。面白い。」と、反応はさまざまですが、涙あり、笑いありの楽しい時間です。認知症で通院されている方もおられます。「認知症になってもお互いのことを知っていれば、隣人が自分を取り戻す助けになってくれる。」との理解が、一歩ずつ広がっていったらと思います。

また、本人を起点とした施設での日常のケアや地域との関わりを通して、認知症の人、一人ひとりにとっての地域とはどのようなものか、その一端を知ることになります。

開設後、入所者聞き取り調査を実施したところ、介護への希望の第一は、自宅への帰省でした。早速、職員が自宅帰省に一緒に出かける支援を始めました。14 年間、毎年 30 人以上の入所者の方々の自宅帰省に付き添い、家族だけでなく、長年生活を共にしてきたなじみの人々との繋がりや地域の様子に触れてきました。

こうした機会は、職員にとっても貴重な体験となっています。暮らしの場、特に農業を基板とした本人をよく知る人々の個性溢れる豊かでおおらかな感情は、認知症の人の心を解きほぐし、自然と本人らしさが浮き彫りになり、安心と笑顔が戻ってきます。本人自身の持つ力、地域の、人々の力によって認知症になっても地域の中でこれまでと変わらぬ価値ある存在であることを互いが実感し、介護とは、認知症支援とはどうあるべきかを考えさせられる瞬間です。

施設ではアンケート調査や事例と共に、「共にケアをより良く」という趣旨のもと、関係するみなさんにもご理解いただき、写真や映像を数多く残してきました。

本日は認知症を生きる本人と家族、地域の人々、施設の職員が共に歩む姿を、ドキュメンタリー映像と共にお伝えします。

ドキュメンタリー映像 「わたし」の大切なつながり ～家族・地域・施設と共に～。

櫻井記子（さくらい のりこ）先生 ご略歴

社会福祉法人ジェイエー長野会特別養護老人ホームローマンうえだ施設長

佐久総合病院看護専門学校卒業

看護師 介護支援専門員

虎の門病院、厚生連鹿教湯病院、佐久総合病院等を経て、2014年より特養の看護や人材育成、地域の認知症支援等に携わる